

日本地理教育学会・小中高一貫地理教育カリキュラム研究グループ

2023 年度活動報告書

日本地理教育学会 2023 年度研究グループ
小中高一貫地理教育カリキュラム研究グループ(代表: 吉田剛)

報告書目次

2023 年度研究グループ活動

2023 年度各ユニット活動報告

- カリキュラム理論ユニット
- カリキュラム研究ユニット（国内カリキュラム・諸外国カリキュラム）
- ESD・SDGs ユニット
- 地理学体系ユニット
- GIS・フィールドワークユニット
- テクノロジーユニット
- 実践ユニット
 - グループ A
 - グループ B
 - グループ C

2023 年度研究業績一覧

学会発表・報告

書籍・論文等

研究グループ公式ウェブサイト

2023 年度研究グループ活動

| | | | |
|-------|---|-------------|----------------------------|
| 第1回例会 | 2023年4月28日(金) | 20:00~21:00 | オンライン |
| | 1) 2023年度研究計画の協議 2) 単元づくりの計画協議 | | |
| 第2回例会 | 2023年6月5日(月) | 20:00~21:00 | オンライン |
| | 1) 新メンバーの紹介 2) 実践ユニットの単元づくり状況とスケジュール 3) 各新ユニットの本年度の主な課題設定 4) 古今書院の執筆状況 5) 専用サイトの情報収集・修正 6) 学会大会シンポなどのスケジュール 7) 学会大会前日の情報交換会(阪上) 8) 日本地理学会秋季大会ほかへの発表情報 9) その他(メンバー追加ほか) | | |
| 第3回例会 | 2023年7月31日(月) | 19:00~21:00 | オンライン |
| | 1) 全大会 2) 実践的報告 | | |
| 第4回例会 | 日本地理教育学会大会兼 | 8/19・20 宮城教 | 大会シンポジウムと一般発表 |
| | | 育大学開催 | |
| 第5回例会 | 2023年10月3日(火) | 19:30~21:00 | オンライン |
| | 1) 実践報告A・B・Cから報告 2) 継続申請(了解済みの件)の実施について 3) 実践ユニットの今後の協議 ①単元づくり修正原稿の収集状況 ②小グループ編成と研究上の留意点と目標(新地理投稿など) 4) 各ユニットの研究動向 5) 12月末の第6回:例会の内容今後検討(中間まとめ)ハイブリッド(学習院初等) 6) 古今書院連載状況 7) 科研申請状況 8) 学会発表状況共有 9) その他 | | |
| 臨時集会 | 2023年11月4日(土) | 14:30~16:30 | ノートルダム清心中・高等学校 (ハイブリッド) |
| | 1) 一貫カリキュラムに向けた単元開発の現状および協議 2) 一貫カリキュラムの理論研究に関する報告 | | |
| 第6回例会 | 2023年12月23日(土) | 16:00~18:00 | 学習院初等科(ハイブリッド) |

会

- 1) 各ユニット中間まとめの簡易報告
- 2) グループ全体の研究の枠組みと方向<案>
- 3) 古今書院連載状況
- 4) 研究情報交換

第7回例会

2024年3月21日(木) 119:00-21:00 オンライン

- 1) 本年度の各ユニットまとめ報告
- 2) 古今書院連載について(13回最終回完了)
- 3) 本年度の日本地理学会公開シンポジウム(3月19日)および一般発表の実施報告
- 4) 次年度の全体例会および書籍出版編集スケジュールの見通しについて
- 5) 科研の結果と今後の研究費獲得について
- 6) 新年度の第1回の幹事・ユニット会の日時調整
- 7) 実践ユニットCの研究集会について
- 8) その他(他学会シンポの件:地理科学、日本地理学会2024春)

2023 年度各ユニット活動報告

| | ユニット名 | ユニット長 |
|---------|------------------------------|------------|
| 理論系ユニット | 1 カリキュラム理論ユニット | 吉田剛 |
| | 2 カリキュラム研究ユニット (国内) | 近藤裕幸 |
| | 3 カリキュラム研究ユニット (諸外国) | 阪上弘彬 |
| | 4 ESD・SDGs ユニット | 永田成文 |
| | 5 地理学体系ユニット | 河本大地 |
| | 6 フィールドワーク GIS ユニット (FW) | 阪上弘彬 |
| | 7 フィールドワーク GIS ユニット (GIS 地図) | 國原幸一朗・伊藤智章 |
| | 8 テクノロジーユニット | 飯島典子 |
| | | |
| 実践系ユニット | 実践ユニット A | 吉田剛・高木優 |
| | 実践ユニット B | 阪上弘彬 |
| | 実践ユニット C | 近藤裕幸 |

カリキュラム理論ユニット

吉田剛（宮城教育大学），永田成文（広島修道大学），
飯島典子（宮城教育大学）

1. 活動の概要

一貫地理教育カリキュラム理論の構築を目指す。そのために、シンポジウムの企画、実践研究との対比、各論としての研究成果の取りまとめや総合的な検討などを行い、汎用的な一貫地理教育スタンダードとなる系統表などの作成を進めて行く。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

ミーティング2回（学会シンポ）など

3. 成果

<日本地理教育学会研究大会シンポジウムおよび一般発表の成果 2023. 8. 19/20>

永田成文「持続可能性に基づいた小中高一貫地理教育カリキュラムの構想－SDGsを活用した地理ESD授業－」，牛垣雄矢「小学校社会科及び中学高等学校地理における人口の扱いに関する一考察」，金田啓珠「既習事項と地図を往復する地理総合の授業づくり－小中高一貫地理教育カリキュラムにもとづいて－」，牛込裕樹「地理総合における地球上の位置や時差の学習の実践と課題」による報告，そして鈴木允「小中高一貫カリキュラムの検討に向けた論点－高等学校「地理総合」を念頭に置いて－」と吉田和義「小学校から考える幼小中高一貫カリキュラムへの展望」によるコメントが得られた。総合討論では，ESDとSDGsに関する内容，学習指導要領上の「構想」に関わる観点，実践を踏まえた議論などの必要性や，スタンダードを考える上での学習指導要領の枠組みの背景となる系統表などが課題としてあげられた。これらの発表・討論などは，次の『新地理』（第71巻第3号2023年）のシンポジウム記事にて各発表がpp.48-77にわたって公表された。

そのほか一般発表でも6本の次の各論が得られた。飯島典子・岡本恭介・笹平剛「幼小接続期の発達と生活に応じた安全教育」，近藤裕幸「中学校社会科地理的分野「世界と日本の地域構成」からみた小学校と中学校地理教育の一貫性」，木場篤「電子ジャーナルを活用した高等学校「地理探究」授業実践の可能性－小中高地理教育一貫カリキュラムの視点から－」，阪上弘彬・中村洋介ほか「日本の小中高の地理教育ではフィールドワークはどのようなテーマで研究されてきたのか－システムティックレビューの中間報告－」，國原幸一朗「学習指導要領と教科書から見た地理的技能を育成する一貫カリキュラムの視点」，伊藤智章「「一人一台端末」環境に対応したGIS（地理情報システム）教材の開発と実践（第1報）」。大会を通じて，一貫地理教育研究の動きが様々な論点にわたって波及していることが確かめられる。

<日本地理学会秋季大会および日本社会科教育学会での成果>

吉田剛によって，日本地理学会秋大会（2023.9.16）にて「持続可能性の概念とウェルビーイングに関する理論化」が発表され，一貫研究におけるウェルビーイング実現に向けた理論化が検討された。また日本社会科教育学会（2023.10.28）にて吉田剛・鹿内隆世・都築和希「一貫地理教育カリキュラムにおける小学校社会科の単元開発」が発表され，小学校社会科の様々な実際の実践事例の分析から潜在的な地理的概念の階層性・順次性が見いだされ，第6学年の政治・歴史単元の一部を除き，小学校社会科における地理的概念による系統が考察された。

<人文地理学会地理教育研究部会例会での成果 2024.2.3>

コーディネーター：河本大地のもとで一貫研究に関するミニシンポが行われた。

テーマ「玉野で小中高一貫地理教育カリキュラムを考える」。

講演：吉田剛「小中高一貫地理教育カリキュラムの構想について」。報告①：常井仁美（岡山県立玉野高）「体験に基づく地理教育の実践と課題～岡山県立玉野高等学校の事例を通して～」。報告②：川崎浩一（玉野市立日比中）「玉野市内の小・中学校における地域学習・地理教育の実践と課題」。総合討論「近未来社会の小中高一貫地理教育カリキュラムの在り方」。

ディスカッションでは、本グループの河本大地先生や木場篤先生、神戸大の藤田先生や岡山大学の川田先生ほかの中国地方・近畿地方の大学教員や高校教育も加わり、ワークショップを取り入れ、様々な意見交換が行われた。理論と実践の対照による効用、一貫カリキュラムによる功利性、実践からの論証などの前向きなが活発な議論がなされた。

<日本地理学会春季大会のシンポジウムおよび一般発表の成果 2024. 3. 19/20>

「次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性」－〔オーガナイザー〕田部俊充（日本女子大）・吉田剛（宮城教育大）・井田仁康（筑波大）－において、次の発表が行われ、教育行政の動きも踏まえ、一貫研究の幅広い議論が行われた。

田部俊充（日本女子大）：企画趣旨：次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性。

吉田剛：一貫地理教育カリキュラムにおける地誌学習の方向。

河本大地：「地誌」と「系統地理」の関係を小中高一貫で考える—小中高一貫地理教育カリキュラムを構築するために。

阪上弘彬：一貫地理カリキュラムにおける地誌学習はいかにあるべきか—ドイツの地理教育の分析。

永田成文（広島修道大）：小中高一貫カリキュラムを見据えたESDとしての地誌学習の構想—現代世界の諸課題に着目して。

三橋浩志（文部科学省）：最近の教育改革の動向と地理教育・地誌学習。濱野清（兵庫教育大）：コメント：学校種をつなぐ地理、地誌学習内容。

井田仁康（筑波大）：次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性（総括）。

本シンポによって、今日の我が国の教育行政の動きや実行性の側面からの議論も交えて、地理的概念と地誌的学習の系統、ドイツの一貫カリキュラムの事例、地誌と系統地理の系統、地理的概念と持続可能性の概念による具体的なカリキュラムなどの理論的な成果が得られた。

<幼児教育のフィールド調査>

吉田剛と飯島典子によって、幼児と地理認識に関して、宮城教育大学附属幼稚園において教員との意見交換を行い、教育活動に関わる環境配慮の計画資料を収集し、現在、分析している途中にある。

4. 課題

- 幼児教育・小学校生活科における地理学習の分析や系統の詳細な検討
- 広く公表していくための汎用的な一貫地理教育スタンダードとしての系統表の整備
- 系統表におけるやや具体的な内容の配置
- 実践からの理論分析
- 児童生徒への地理的認識に関する調査
- 歴史的分野や公民的分野あるいは理科教育や総合学習などとの接点に関する検討ほか

文責：吉田剛（ユニット長）

カリキュラム研究ユニット (国内カリキュラム)

近藤裕幸（愛知教育大学），前田諒（仙台市立蒲町中学校）
守谷富士彦（桃山学院教育大），吉田剛（宮城教育大学）

1. 活動の概要

このユニットの目的は、学習指導要領の地理教育カリキュラムの特徴を目的・内容・技能などの視点から明らかにすることと、これまで地理教育では小中高の一貫性をどのように研究してきたのかを明らかにすることである。

2. ユニットミーティングの開催記録

2023年：①4/12, ②5/9, ③6/20, ④7/18⑤8/29, ⑥9/26, ⑦10/17, ⑧11/14, ⑨12/12

2024年：⑩1/16, ⑪2/28, ⑫3/26

3. 成果

(1) 吉田

現行の幼稚園教育要領解説や小中高学習指導要領解説より地理的概念に関する分析を行い、その特徴や傾向より、一貫カリキュラムの「内容」「方法」「価値」の三領域におけるそれらの役割について考察し、一貫カリキュラムのねらいとともにスコープやシーケンスからなるフレクワークの原理を導き出した（吉田，2023）。また一貫カリキュラムとなる豪州 NSW 地理シラバスの分析を通して、我が国の小中高を一貫する「社会的事象等について調べるまとめる技能」の改善に向けての示唆を行った（吉田・管野，2023）。

(2) 守谷

前年度は、地理教育は小中高の一貫性についてどのように研究してきたのか？という問いを立て、戦後の研究史を分析して地理教育の一貫カリキュラム研究史の特徴を示した。しかし、その妥当性に課題が残り、社会系教科の歴史や公民と比較して関連性や特質を見出しつつ、その連携の在り方を検討する必要性が生まれた。2023年度は、歴史教育は小中高の一貫性についてどのように研究してきたのか？という問いを立て、戦後の研究史を分析し、地理教育の一貫カリキュラム研究史と比較することを目的とした。分析の結果、提言から次第に調査・開発が進む点や、個別の小中・中高一貫校の実践研究が盛んな点など、類似点があった。歴史教育は地理教育の鳥海や山口のような大型プロジェクトが発足しない一方で、一貫の名を冠せずともカリキュラム構成理論化を志向する研究が数多く存在した。この背景には、米国から影響を受けた社会科歴史と日本の歴史学という学問との狭間にある歴史教育研究の境遇が関連していると考えられる。それは、社会科地理と地理学が「一貫」という視点で教育と学問の関係性を再度議論し、整理しながらカリキュラム構築する必要性を示唆している。

本研究は、3月20日（水）に、2024年日本地理学会春季学術大会で発表を行う。

(3) 前田

前年度から継続して、小・中・高の各学習指導要領における「地理的技能」の記述について経年的な分析を行った。そこでは「地理的技能」に関わる目標の移り変わりが、四つの時期に分類できることを明らかにした。それは、分野成立直後で各校種における技能の目標が十分に整理されていない第一期、教育の現代化の動きの中で各校種において育成する技能に関連が見え始めた第二期、内容精選の中で高校における技能の目標が示されなくなった第三期、そして新しい資質・能力の考えの下再び各校種で技能の記述が示された第四期のように分けられた。

また、地理的技能と関連して、地理教育における情報化のあり方についても分析を試みた。先行研究や実践事例のレビューを通して、VRやAR、プログラミングなど、最新の研究動向を整理・分類した。一方で、学習指導要領の記述との関連を分析するなど、カリキュラムにおける位置付けや扱いの

変遷などを検討する段階までは行えていない。

次年度は、上記の研究成果を整理して発表していきたい。

(4) 近藤

地理教育と公民教育の小中高一貫カリキュラム研究史を比較することで、地理教育の一貫カリキュラム研究における現在の位置づけや課題を明らかにすることに取り組んだ。

その結果、公民教育では、政治教育限定であるものの理論化研究フェイズに到達し、現状をアンケートなどで把握した上で一貫性にもとづく授業開発が提案されており、理論と実践がうまくつながっていることがわかった。

一方、地理教育では理論化研究フェイズにはまだ到達していないが、今地理教育一貫カリキュラムの構想が理論化されつつある動きがある。ただ、地理教育の現状を把握した上で理論化がなされているのかについては疑問符がつくため、至急現状をふまえた上での理論化が待たれるところである。生涯教育や社会教育からみた地理教育のありかたも検討課題である。具体的には、理論にもとづく実践も増やしていく必要があり、これによって早晩理論と実践がむすびつくことになるだろうと結論づけた。

この研究は、日本地理学会 2024 年春季学術大会で発表し、未定であるが学術誌に投稿予定である。

4. 課題

(1) 吉田

課題には、次の二つがあげられる。

- ①幼稚園教育要領解説や小中高学習指導要領解説における地理教育関連の記述について、内容にまとめごとの特徴に応じた学習過程に関する比較・分析を行うこと
- ②学習指導要領解説などに記載の指示方向をもとにして、新たな地理的技能の方向性について検討すること。

(2) 守谷

- ①地理教育、歴史教育、公民教育の一貫カリキュラム研究史の比較研究
- ②幼児教育を含めた戦後日本の地理教育カリキュラムの内容の分析
- ③カンボジア教育省を事例とした、国家カリキュラム構築過程における多様な主体間の相互作用に着目した分析

(3) 前田

- ①各校種における地理的技能育成の系統性に関する具体的分析
学習指導要領本文・解説などの記述を対象に、発達段階に応じてどのような技能が育成されてきたのか具体的に分析し整理する。
- ②地理教育における情報化への対応とその変遷について
学習指導要領の記述を対象に、我が国において情報化に対してどのように対応しようとしてきたのかその変遷と現状を明らかにする。同時に、新たな技術と地理的技能との関連についても分析する。

(4) 近藤裕幸

- ①「幼児教育における地理教育に類するものの研究」
幼稚園教育で扱われている領域「環境」と「人間関係」には地理教育に関するものがみられることから、これらを抽出し、その変遷を明らかにする。
- ②「目標分類学の視点からみた戦後高等学校における地理教育目標の類型化」
目標分類学の視点から、戦後日本の高等学校における地理教育の目標変遷の特徴を、タキシノミーの視点から明らかにする。
- ③地理教育・歴史教育・公民教育の一貫カリキュラムの研究史の特徴を明らかにする。

文責：近藤裕幸（ユニット長）

カリキュラム研究ユニット (諸外国カリキュラム)

管野友佳（仙台市立西山小），阪上弘彬（千葉大学）
永田成文（広島修道大学），吉田剛（宮城教育大学）

1. 活動の概要：

本ユニットは幼小中高一貫のカリキュラムの在り方を検討するために諸外国における地理教育カリキュラムを調査することを主たる活動とする。そこで、本ユニットのメンバーが研究対象国のカリキュラムを中心に持ち上げ活動を実施した。

具体的には以下の項目について計画を立て、実施した。

- (1) 諸外国カリキュラムの継続調査を実施する。
- (2) 国内における諸外国地理カリキュラム研究史の調査を実施する。

| | 全体・CGE | 英国 | カナダ | 米国 | 豪州 | シンガポール | 香港 | ドイツ |
|----|--------|----|-----|----|------|--------|----|------|
| 吉田 | | | | ◎ | ◎NSW | △小学校 | ○ | |
| 永田 | | | | △ | ◎VIC | ◎ | | |
| 管野 | | | | | ◎NSW | | | |
| 阪上 | ◎ | ◎ | | | | | | ◎州カリ |

*黄色部分は『地理』で原稿化が完了した部分。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

7月13日@オンライン：今後の活動，諸外国カリキュラムの検討

3. 成果

- ・諸外国カリキュラムの成果の一部を，日本地理学会地理教育公開講座で報告予定（阪上）。
- ・雑誌地理での執筆

4. 課題

- ・他の諸外国カリキュラムの検討と成果の発表
- ・カリキュラム研究史の継続

文責：阪上弘彬（ユニット長）

ESD・SDGsユニット

今野良祐（筑波大附属坂戸高等学校）【中等地理における ESD・SDGs の授業の考え方と実践】

齋藤亮次（公文国際学園中等部・高等部）【中等地理における ESD・SDGs の新しい手法と実践】

阪上弘彬（千葉大学）【諸外国の ESD・SDGs 研究の動向と新しい手法】

永田成文（広島修道大学）【ESD・SDGs の関連と ESD としてのカリキュラム】

1. 活動の概要

ESD・SDGs に関わる授業理論や授業実践やカリキュラムについて、大枠でメンバーそれぞれに担当を割り当てて、ユニット会で発表して改善していく。

地理教育と ESD・SDGs の教育とのかかわりを検討した上で、SDGs の目標やターゲットを視野に入れながら、地理教育における ESD 授業について理論・実践面から検討し、ESD と SDGs の視点から小・中・高一貫カリキュラムを提案(系統的に地理 ESD 授業に SDGs の考え方をどのように導入していくのか)する。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

2022 年度①～⑧開催

- ⑨ 2023 年 4 月 20 日(木)20:00-21:00 (ZOOM)
ESD・SDGs の関係の再確認と今年度の進め方の確認
- ⑩ 2023 年 5 月 30 日(木)20:00-21:00 (ZOOM)
ユニットの月刊『地理』分担執筆内容の検討
- ⑪ 2023 年 6 月 22 日(木)20:00-21:00 (ZOOM)
ユニットの月刊『地理』分担執筆内容の検討 2 と本年度の目標確認
- ⑫ 2023 年 7 月 20 日(木)20:00-21:00(ZOOM)
日本地理教育学会シンポジウム要旨の検討とグローバルシティズンシップの考え方
- ⑬ 2023 年 8 月 10 日(木) 20:00-21:00 (ZOOM)
日本地理教育学会シンポジウム発表の確認と『地理』原稿の最終校正と開発教育等の紹介
- ⑭ 2023 年 9 月 19 日(火) 20:00-21:00 (ZOOM)
日本地理教育学会シンポジウムの発表報告と各メンバーの研究動向の確認
- ⑮ 2023 年 10 月 31 日(火) 20:00-21:00 (ZOOM)
ESD・SDGs カリキュラムの大枠の確認と各メンバーの研究動向の確認
- ⑯ 2023 年 11 月 21 日(火)20:00-21:00 (ZOOM)
中高の地域調査連携の紹介とルーブリック評価と文化摩擦を導入した異文化理解の紹介
- ⑰ 2023 年 12 月 18 日(月)20:00-21:00 (ZOOM)
2023 年活動の中間振り返りと ESD へのリフレクションの考え方の導入の検討
- ⑱ 2024 年 1 月 26 日(金) 20:00-21:00 (ZOOM)
日本地理学会春季シンポ要旨確認と地域調査の系統性
- ⑲ 2024 年 2 月 22 日(木)20:00-21:00 (ZOOM)
小学校における ESD 実践と地域調査のルーブリックの提案と ESD の歴史
- ⑳ 2024 年 3 月 13 日(水)20:00-21:00 (ZOOM)
2023 年度の活動の振り返りと 2024 年度に向けた各メンバーの研究の確認

3. 成果

(1) 月 1 回のペースを守って ESD・SDGs にかかわる研究や授業実践の報告を定期的に行うことができた。理

論や実践の提案から、現行学習指導要領の単元に沿いながら ESD としての小・中・高一貫地理カリキュラムの大枠を構想できた。

- (2) 月刊『地理』10月号に、「SDGs を活用した地理教育における ESD 授業—小・中・高一貫カリキュラムのアイデア—」としてユニットの ESD 授業に対する考え方やカリキュラムの構想を示すことができた(永田・阪上・今野・齋藤)。
- (3) 2023年8月19日(土)の日本地理教育学会シンポジウムで、ESD としての一貫カリキュラムの構想を発表した(永田)。2024年3月19日(火)の日本地理学会春季学術大会のシンポジウムで地誌的な側面から諸外国の一貫カリキュラムの特色(阪上)や ESD としての一貫構想(永田)を発表した。

4. 課題

- (1) ESD と SDGs の関係については、文部科学省の「持続可能な社会の創り手を育成する ESD は、持続可能な開発目標(SDGs)を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献する」という見解を前提として、国連総会で採択された「ESD for 2030」や OECD の「Education 2030」の GCED (グローバルシティズンシップ教育) の考え方との関係を今後とも継続して検討していきたい。
- (2) ESD としての小・中・高一貫地理カリキュラムの大枠をもとに、日本や世界の ESD の動向を踏まえながら精緻化をはかる。また、特定の内容に着目して小・中・高の授業の違いや評価の違いを示していきたい。

文責：永田 成文 (ユニット長)

地理学体系ユニット

牛垣雄矢（東京学芸大学）

金田啓珠（山形県立東桜学館中学校・高等学校）

河本大地（奈良教育大学）， 深見聡（長崎大学）

1. 活動の概要

本ユニットのミッションは、「地誌・系統地理・主題などの地理教育カリキュラムにおける系統について検討する。その他 観光 地域研究 都市などのトピックからの系統についても検討する」こととされている。検討事項が多岐にわたるが、昨年度に、児童生徒が学校教育を通じて「地域」をどう形づくるかが大事との議論がなされた。

そこで各自の関心のあるテーマについて、各学校種・学年・教科における「地域」に関わる内容とつながりの洗い出しをおこなうこととした。まずは、人口、ローカル地域学習、身近な地形と防災等に関して、現行の小・中・高の学習指導要領における各テーマの取り扱い方や、教科書における各テーマの取り扱い方を調べまとめている。また、大学生の記憶・経験から探るアプローチも採り入れている。

さらに、小学校の生活科・社会科、中学校の社会科地理的分野、高校の地理歴史科地理総合の教科書を、地理学の体系である「系統地理」と「地誌」のクロス表（マトリックス）を作成して分析し、一貫カリキュラムとしてのあり方を検討している。

2. ユニットミーティングの開催

メール等で適宜

3. 成果

月刊『地理』68巻12号に「地理学の体系と小中高一貫教育カリキュラムとの関係を探る試み」を掲載した。また、研究成果を牛垣・金田・河本が学会等において発表した。さらに、論文等も出すことができた。

4. 課題

順調に進んでおり、特になし。

文責：河本大地（ユニット長）

フィールドワーク GIS ユニット (フィールドワーク)

【小学校】大矢幸久（学習院初等科）
【論文レビューの総括】阪上弘彬（千葉大学）
【高等学校】椿実土里（北海道恵庭南高等学校）
【中学校】中村洋介（公文国際学園中等部・高等部）
【高等学校】林靖子（獨協埼玉中学高等学校）

1. 活動の概要

当初の活動は中村，阪上の2名であったが，2022年8月からは大矢，林，9月からは椿が加わって5名で活動した。おもな活動は，小中高のフィールドワークの現状を学習指導要領と文科省検定済み教科書から確認し，「フィールドワーク」の仮の定義を定めた。ミーティング（オンライン）は月に一度開催し，11月以降のミーティングでは，所属メンバー1名からフィールドワーク実践報告または外国の文献紹介を行い，メンバー間で共有した。11月からは Systematic Review Watanabe et al. 2021）の方法にしたがって，小中高のフィールドワークに関する約130本の研究・実践論文を抽出して，分担してレビューを行った。

なお，「フィールドワーク」の仮の定義は，「フィールド（調査地）に出る学習をいい，その事前事後で地形図・写真などの判読，発表，振り返りなどの諸活動が入る学習」とした。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

- ① 5月17日@Zoom：本年度のスケジュールの確認
- ② 6月11日@Zoom：論文レビュー結果の報告（各学校種で）
- ③ 8月3日@Zoom：学会発表内容の確認
- ④ 8月19日@対面（宮城教育大学）：日本地理教育学会での発表内容の確認
- ⑤ 12月13日@Zoom：今後の研究の進め方の確認

3. 成果

- ①約100編のフィールドワーク学習に関する論文をレビューして，研究の動向，課題を整理
- ②①をもとに，日本地理教育学会におけるシステムティックレビューの中間報告
- ③月刊地理への執筆

4. 課題

- ①システムティックレビューをまとめて学会誌に投稿する。
- ②論文だけでなく，FWに関わる書籍の研究内容についても検討する。

文責：阪上弘彬

フィールドワーク GIS ユニット (GIS・地図)

メンバーと所属（五十音順）

伊藤智章（富士東高），國原幸一朗（名古屋学院大学）
河本大地（奈良教育大），吉田剛（宮城教育大学）

1. 活動の概要

國原が小中高の学習指導要領と教科書レベルにおけるGIS・地図の活用技能の育成方法について日本地理教育学会大会（宮城教育大学）で発表し，大学紀要（國原，2023）にまとめた。実践レベルでは，伊藤が高等学校の「地理総合」におけるコア・アプリと補助アプリを選定し，汎用性の高い教材開発に取り組み，月刊「地理」などで発表した（國原・伊藤，2023）。また，河本は高等学校「地理総合」で育成すべきWeb GIS 活用力について大学新入生の現状から検討し（河本，2023a），大学生がWeb GISの何が使えて何が使えないのかについて報告した（河本，2023b）。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

適宜メール等で情報交換を行い，3月に実践のまとめのためのオンライン会議を実施した。

3. 成果

ユニット会の活動開始時に，生活科と地理歴史科が設置されてからの学習指導要領の内容（目標・内容・内容の取り扱いに焦点を当てた）と，小中高の教科書（全社にまで広げた）における地図・GISの取り扱い方を整理することから研究を始めることを確認したが，本年度ようやく整理して系統性を見いだすことができ，國原・伊藤（2023）と國原（2023）で公表した。また大学生のGIS活用能力を検討して，高等学校地理の地図・GIS活用技能における課題も明らかにした（河本，2023a：2023b）。

4. 課題

学習指導要領と教科書レベルでの検討が終わり，研究論文や実践論文でのGIS・地図の取り扱い方や，外国のナショナル・カリキュラムやナショナルスタンダード，教科書などにおけるGIS・地図の取り扱い方を参照しながら，GIS・地図活用技能の系統的な育成方法を概念・理論化することに注力するとともに，実践レベルでの検証と，汎用的な利用に向けた教材開発，近未来を意識したGISの活用について検討していくことが，今後の課題である。

文責：伊藤智章（ユニット長）・國原幸一朗

テクノロジーユニット

飯島典子（宮城教育大学），大江田志帆（宮城教育大学・院），岡本恭介（宮城教育大学），國原幸一朗（名古屋学院大学），鈴木達也（水戸第一高附属中），前田諒（仙台市立蒲町中），吉田剛（宮城教育大学）

1. 活動の概要

地理教育におけるICT・AI・ドローンなどの活用法やデータ公開されている地理教材の活用案について話題提供をもとに検討した。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

| 開催回・日 | 話題提供者 | 話題提供の概要 |
|-----------------|-------|---|
| 第1回 (7月4日) | 吉田 剛 | 新しい地理的技能に関わる ChatGPT の活用（教材作成）の可能性について報告した。 |
| | 岡本恭介 | 国土地理院のサービス，VR 関連の最近の動向を調べ報告した。 |
| 第2回 (7月11日) | 飯島典子 | 幼児の手書きの地図情報を高める方法として，タブレットを用いて写真を配置するアイデアについて話題提供を行った。 |
| 第3回 (8月1日) | 木場 篤 | 高等学校地理総合での授業実践（「大規模な農業は安定地域で発達しているのか？」）を事例に，生徒が作成したスライドの紹介，Chat GPT による解答の紹介を行った。 |
| 第4回 (9月20日) | 鈴木達也 | 企業におけるVR・ARの活用事例・遠隔授業における授業実践を報告した。また，VRを用いた自然災害シミュレーションを通しての安全教育，各学校の地域調査で活用したAR教材の蓄積・共有の可能性を提案した。 |
| | 大江田志帆 | 対話に着目した ICT 活用の実践に向けての研究。着眼点には，事実・関係・価値の認識に向けて対話をどのように位置付けるのか，Google Classroom などで活用法の見通しについて発表した。 |
| 第5回 (10月12日) | 國原幸一朗 | 市民向けに開講した講座内容をもとに地図の面白さや空間認知をどう図るかを報告した。 |
| | 前田 諒 | 中学校における ICT 活用事例として，主に，①デジタル地図の活用について，②ロイロノートによる思考ツールの活用について，③ハザードマップ等主題図の活用について提示した。また，その中で最新の分野である AR・VR などの先行研究例についても紹介した。今後の展望に期待が持てる一方で，現場における普及の難しさについても言及した。 |
| 第6回 (12月13日) | 木場 篤 | 高等学校地理探究での授業実践（「オルタナティブなグローバリゼーションについて考える」）を事例に，生徒がグループ活動を通じて提案したオルタナティブなグローバリゼーションについて，Chat GPT のプロンプトを用いてフィードバックし，それをもとに提案を修正してブラッシュアップする，といった活用事例を報告した。 |
| | 前田 諒 | 本発表においては，テクノロジーに関わる話題として，次の3つの授業例および教材化の方法について提案した。①中学校現場においてもプログラミング的思考の育成が求められていることから，チャートによって雨温図の読み取りを論理的に行う方法を提案した。 |

| | | |
|--|--|---|
| | | <p>②Google スプレッドシート (Excel) の統計資料について、データの抽出を補助する機能を用いて、地図化を助ける方法についても紹介した。</p> <p>③ライブカメラや「モバイル空間統計」などリアルタイムで情報を獲得できる資料の教材化のあり方について提案した。</p> |
|--|--|---|

3. 成果

- (1) 期間中にのべ11人が話題提供し、質疑応答を通じて理解を深めた。主なテーマとしては、地図の面白さを伝える地図活用、Google Classroom・デジタルシンキングツール・ChatGPTなどを活用した地理教育の実践、地理に関連するデジタルデータやVRなどの活用可能性について議論を行った。
- (2) ②日本地理教育学会第73回大会においてユニットメンバー2名の連名で「幼小接続期の発達と生活に応じた安全教育」のテーマで360度バーチャル教材について報告した(2023年8月20日)。
- (3) ③月間「地理」68巻11月号においてバーチャル空間を活用した地理教育、幼児期の地図理解を深めるICT活用、中学校現場におけるICT活用といった内容を掲載した。

4. 課題

2023年度の活動を通して、ロイロノートやChatGPTなどは効果的に地理教育に活用する方法を共有し、地理データのデジタル化やシステム化については多様な情報を収集できた。ここから、情報化は急速に進展し、自由に利活用できるデジタル地理データの種類が豊富になるほど、紙媒体をデジタルに置き換えるのではなく、デジタル情報やシステムを使って学習する新たな授業設計の構築が求められるとの認識に至った。一方でアナログによる実体験の重要性も再認識されたことから、デジタルとアナログの2つの観点から、学習のねらいに相応しい教材の選択、学習方法について検討することが課題として残った。

文責：飯島典子（ユニット代表）

実践ユニット (グループA)

○吉田剛（宮城教育大），○高木優（神戸大附属中等），
木場篤（ノートルダム清心女子中高），金田啓珠（山形県立東桜学館高），
移川恵理（仙台市立仙台高），牛込裕樹（大妻中野中・高），
前田諒（仙台市立蒲町中），鈴木達也（茨城県立水戸第一高附属中），
辻常路（川西市立明峰中），杵澤遥（宮城教育大附属中），
守康幸（宮城教育大附属中）

1. 活動の概要【実践ユニット・グループABC全体】

地理的概念などを重視した幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークに基づく授業設計などの実践的研究を行い、一貫地理教育スタンダードづくりのための実践的な検討を行う。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

【グループA】

①6月27日，②7月12日，③7月31日（第4回全体例会），④8月9日，⑤9月6日，⑥10月3日（第5回全体例会），⑦11月4日（臨時研究集会：ノートルダム清心女子高・対面），⑧11月20日（実践ユニット会議），全8回ほどの授業づくりや実践に関する意見交換を行った。

3. 成果

【グループA】

（1）各自で作成された単元指導計画をもとに，フレームワークに対照した授業設計や実践上の方向性などが検討され，様々な学校種や立場からの意見交換がなされた。その一部は，全体例会での場や日本地理教育学会でのシンポジウムや一般発表などにおいて公表された。○木場篤「電子ジャーナルを活用した高等学校「地理探究」授業実践の可能性—小中高地理教育一貫カリキュラムの視点から—」，○金田啓珠「既習事項と地図を往復する地理総合の授業づくり—小中高一貫地理教育カリキュラムにもとづいて—」，○牛込裕樹「地理総合における地球上の位置や時差の学習の実践と課題」。吉田・國原（2023）によって，シンポジウムの概況や総合討論などに関する記事も得られた。

（2）2024.2.3に開催された人文地理学会地理教育部会のミニシンポジウムにおいて，吉田剛による一貫地理教育カリキュラムのフレームワークに対照して，中学校（川崎浩一氏）と高等学校（常井仁美氏）からの一貫地理教育の実践による協議にも繋がられ，さらに京都洛南高校・附属中ほかでの協議にも広がられ，関係する学会に留まらず，近畿・中国地方において広く学校現場での関心が得られてきた。

（3）小学校での一貫研究については，日本社会科教育学会（2023.10.28）にて吉田剛・鹿内隆世・都築和希「一貫地理教育カリキュラムにおける小学校社会科の単元開発」が，中学校・高等学校での一貫に関わる研究として，○守康幸「生成AIを活用した資料づくりと地理学習の実践」，○移川恵理「都市地理学習におけるICT活用」が2023年度東北地理学会第2回研究集会にて発表された（2024.3.3）。小学校における一貫地理教育の可能性が論じられ，ICTや生成AIの活用を通じた地理教育の実践の可能性が実証的に説明された。

（4）古今書院の月刊地理の連載において実践的な成果（中学校地理と，幼小中高一貫地理）の報告がなされた。○鈴木達也・吉田剛（2024.2）：一貫地理教育を意識した中学校の単元開発—日本の諸地域「関東地方」—.月刊「地理」vol.69(3), pp.90-95. ○吉田剛・高木優・牛込裕樹・木場篤（2024.3）：近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理教育の可能性.月刊「地理」vol.69(4)（印刷中）.これらによって，月刊地理の連載は終了し，今後の一層の実践研究や理論との往還などに向けた意向も伝えられた。

4. 課題

【グループA】

実践ユニットAのメンバーは、単元作成や実践報告などを一通り終えて、共有することができた。このことをもとにして、さらに各自の単元開発をブラッシュアップしながら、地域調査、地理的概念、防災、地球的課題、世界地誌などの小グループから一貫カリキュラムとしての単元開発構想や一部実践を進め、随時、学会誌などへの投稿・掲載などを目指していく。例えば新地理(ノート・調査報告・資料)、E ジャーナル GEO など。状況に応じては、提出前に内部での検討もあり得る。そしてさらに理論となるフレームワークと対照しながら、理論としての課題、実践としての課題を明確にしつつ、一貫地理教育カリキュラムのスタンダードとその系統表について構築していく。

文責：吉田剛（実践ユニット・グループA代表）

実践ユニット (グループB)

伊藤直哉（広島大学附属中・高等学校）
内川健（成蹊小学校）
大矢幸久（学習院初等科）
阪上弘彬（千葉大学）
椿実土里（北海道恵庭南高）
中谷佳子（千葉大学教育学部附属小学校）
三浦徹（北海道札幌丘珠校高）

1. 活動の概要

小学校（生活科含む）から高校に至る一貫地理カリキュラムに基づく単元開発に取り組む。具体的には以下に取り組んだ。

- (1) 各メンバーが単元開発シートに基づき開発した結果を共有する。
- (2) 一貫となる軸を設定し、その軸に基づく小～高の単元を開発する。

2. ユニットミーティングの開催記録と主な内容

- ① 7月25日@Zoom：単元シートの発表と検討
- ② 10月2日@Zoom：単元シートの発表と検討
- ③ 3月2日@Zoom：単元シートの発表と検討、一貫軸の検討、次年度の流れの確認

3. 成果

- (1) 各メンバーの開発した単元計画案の共有
- (2) 一貫軸としての「街づくり、社会づくり、社会形成」をテーマに設定し、検討を開始

4. 課題

(1) (2) については軸を設定できたものの、これに基づく検討結果については次年度に持ち越しに。

次年度は、まず各学校種で「街づくり、社会づくり、社会形成」といったテーマに関しての実態（学習指導要領や教科書など）、自身の実践上の経験（テーマに関連した実践がある場合はその概要、それを扱うことの難しさなど）について発表しあい、他の学校種における取組について理解を図り、そのうえで、接続できそうな点を検討し、最終的に単元開発に取り組みたい。

文責：阪上弘彬（実践ユニット・グループB代表）

実践ユニット (グループC)

伊澤直人（西尾市立東部中学校）
國武聖志朗（愛知県知多市立東部中学校教諭）
栗本一輝（愛知教育大学附属名古屋中学校）
小澤裕行（犬山市立犬山北小学校）
児玉和優（愛知教育大学附属名古屋中学校）
清水亮佑（名古屋市立栄小学校）
鈴木瞭（名古屋市立緑高等学校）
八木龍一（愛知教育大学附属名古屋中学校）
近藤裕幸（愛知教育大学）

1. 活動の概要

実践と理論にもとづいた小中高一貫の地理教育カリキュラムを作成することである。

2. ミーティングの開催日時および成果等

- ・4月24日（月）19:00：顔あわせ，グループDの目的確認，進捗報告
- ・5月8日（月）19:00：各自の一貫単元案を発表，グループの目的の明確化，
- ・6月12日（月）19:00：進捗報告，2つめの単元構想案作成について依頼，全員でつくるカリキュラム作成（「身近な地域調査」，7月末例会で報告用，大学での出版）について提案
- ・7月4日（火）19:00：7月末例会発表者決定（伊澤先生，児玉・栗本先生），進捗報告
- ・8月29日（火）13:30：例会の反省，「身近な地域の調査」論文の検討，「国際理解」授業（小澤先生），進捗報告
- ・9月25日（月）19:00：「身近な地域の調査」論文の検討，グループDがグループCに変わることを予告
- ・10月31日（火）19:00：鈴木先生提供の高等学校資料をもとに意見交換，各自の指導案を皆で共有し，グループD全体の進捗を確認，グループ内を2つの小チームに分割した（伊澤先生・小澤先生／栗本先生・児玉先生・八木先生・鈴木瞭先生）。
- ・11月20日（月）20:00：全体の例会（実践グループの進捗確認等）後，緊急ミーティング（國武先生の紹介）
- ・12月4日（水）19:00：清水先生紹介，小チームの進捗報告（観光と地域調査，工業），「地域調査」論文の進捗（初校済）
- ・1月9日（火）19:00 単元構想案 ①地域を観光の視点からみつめる②立地を検討
- ・2月14日（水）19:00 ①工業立地②国際理解③観光教育の一貫カリキュラムを検討
- ・3月14日（木）19:00 ①工業立地②国際理解③観光教育の一貫カリキュラムを検討，新年度の目標確認

3. 成果

(1) メンバー全員で論文「小中高校と大学教員の共同研究による小中高一貫の視点からみた単元『身近な地域調査』の課題と改善」を執筆した。これは，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第5集』に掲載される（2024年に出版予定）。

本研究の目的は，小学校，中学校，高等学校で行われている身近な地域調査に関わる単元が，学校種を越えて系統的に行われているのかを概観，分析し，そこに課題を見いだした上で仮案を作成し，その後小学校・中学校・高等学校の現職教員による批判検討を通して，改善案を提示することであった。

結果としては，地理教育の中核として位置づけられる身近な地域の調査について，各学校種や各学年

でどのように学んでいくのかを概観することで、小学校 5, 6 年時に課題があり、それは中学校での地域調査とのレベルの違いとも相俟って問題となっていることを確認し、本稿の考察においてその問題を解決するための方策をわずかではあるが提案した。このように、小中高校で学ぶ地域調査の学習内容を改めて精査することで、カリキュラムの一貫性とは何かに気がつくことができ、継続的に地理的な見方・考え方を育成することの必要性を再確認することができた。

また、この度の小中高大教員の共同研究の試みは、単なるカリキュラムの一貫性を概観するだけではなく、自分が属する学校が 12 年間の成長において、どこに位置づけられるのかを見つめ直す体験であったことも、現職教員の口から聞くことができたことから、カリキュラムの一貫性を通した見直しは有効な研究方法であることも確認できた。

(2) 実践開発のために、小チームを 2 チーム作り活動する。

- ・伊澤先生・國武先生・小澤先生（観光と地域開発の一貫研究）
- ・栗本先生・見玉先生・清水先生・鈴木先生・八木先生（工業・産業の一貫研究）

(3) 今後は、小チームを組んで小中高一貫カリキュラム作成していくが、個人で研究を進める場合もある（小澤先生の国際理解研究など）。

(4) 実践ユニット・グループ C の研究集会を開催した。（2024 年 3 月 23 日（土）15:30~17:30, 愛知教育大学附属名古屋中学校）

4. 課題

- ・2024 年日本地理教育学会（名古屋学院大学）において、最低 2 本の研究発表を行う。

文責：近藤裕幸（実践ユニット・グループ C 代表）

<実践ユニット全体の活動方針などについて>

- 1) 基本的に実践ユニット ABC の各々で進めて行く。ただし他の実践ユニットグループメンバーや理論系メンバーからの助けを求めることも可能。
- 2) 小・中・高の単元づくり部, および一貫する単元づくりの場面を報告書・書籍にまとめていく。なお本研究グループ全体としての一体性やまとまりも不可欠となるため, いずれの単元づくりにおいても, 地理教育カリキュラム・フレームワーク, とくに地理的概念, 地理的価値態度(ESD), 近未来社会的市民性(ウェルビーイング)などに関して関係づけて開発することを前提として考える。
- 3) 書籍出版に向けて項目立てを進めて行くことも想定し, 単元開発を進める場面もあり得る。
- 4) その他: 日本地理学会連番発表の該当候補を随時検討する。
- 5) 各グループの単元開発の方向

【グループ A】<小グループの活動予定: 変更有>

- 高木(高)+辻(中)+吉田(幼小)(場所・地域の調査【幼小中高】)
- 木場 A+牛込 B+吉田 AB(A スケール【小中高】, B 位置と分布【小中高】)
- 鈴木達+吉田(地域開発【小中高】)月刊地理掲載済
- 前田+沓澤+伊藤+吉田(世界地誌・地球的課題【小中高】)
- 金田+吉田(防災【小中高】)
- 移川+吉田(都市・系統地理【小中高】)東北地理報告済

■守+木場+吉田(地理的技能・AI・GIS【中高】)

■木場先生ほか個人的に進める研究も可能。

<基礎となる単元開発>

小学・3年 市町村の様子/吉田, 市町村の移り変わり/吉田

小学・4年 県内の様子/吉田

小学・5年 産業学習/吉田, 環境保全/吉田,

小学・6年 江戸時代前期/吉田, 模擬行政・裁判・選挙/吉田, 世界の国々と国際連合/吉田

中学・地理的技能/守

中学・ヨーロッパ州/香澤, アフリカ州/前田

中学・身近な地域の調査/前田, 辻

中学・自然災害と防災・減災/鈴木達

高校・地理総合 地図・GIS/牛込, 生活圏の調査と地域の展望/高木, 都市問題/移川, 自然環境と防災/金田, 資源・エネルギー問題/伊藤恵

高校・地理探究・地球環境問題/伊藤恵, 民族・領土問題/木場, ほかにも数件あり。

=====

【グループB】

小学校生活科・第2学年:「学校の近くの公園で遊ぼう」(大矢)

小学校社会科・第3学年:「小金井桜の今とむかし」(内川)

小学校社会科・第4学年:「自然災害から暮らしを守る」(内川)

中学校社会科・地理的分野:「日本の諸地域 中四国地方」(伊藤直)

高校地理歴史科・地理総合:A(1)「球面上の世界と地図」(椿)

高校地理歴史科・地理総合:B(2)「さまざまな地球的課題と国際協力 4 節 食料問題」(三浦)

改めて何か軸を決めて小中高一貫を考えたい。

=====

【グループC】

2つにわけて今後研究を進める(教員名/単元/校種/アピールポイント)。

2-1 伊澤・小澤/地域調査 or 国際理解(地誌)or 観光/小中高/五大概念(吉田案等)をいれる・小中高のつながり

2-2 栗本・児玉・八木・鈴木瞭/産業(工業)/小中高/五大概念(吉田案等)をいれる・小中高のつながり

次回のミーティングは12/6でそれまでに2-1, 2-2それぞれで単元構想案をつくる。その他, 個人でできるひとは進めてもらう。

小澤/国際理解(地誌)/小学校/小学校での地誌学習

伊澤/地域調査/中学校/地元の地域学習

文責: 吉田剛 (実践ユニット総括代表)

2023 年度研究業績一覧

- 『地理』（古今書院）の連載「近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理カリキュラム」：全13回
- 4月号（2023年4月1日発行）
「近未来社会の幼小中高一貫地理カリキュラムの創造」（研究代表：吉田剛）
- 5月号（2023年5月1日発行）
「世界の地理教育の時勢（幼小中高一貫，市民性教育等）ーオーストラリア連邦を事例に」（諸外国カリキュラムユニット：阪上弘彬，永田成文，管野友佳）
- 6月号（2023年6月1日発行）
「戦後の小中高校における地理教育一貫カリキュラム研究の変遷」（国内カリキュラムユニット：近藤裕幸，守谷富士彦）
- 7月号（2023年7月1日発行）
「近未来社会の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの理論（前編）」（カリキュラム理論ユニット：吉田剛）
- 8月号（2023年8月1日発行）
「近未来社会の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの理論（後編）」（カリキュラム理論ユニット：吉田剛）
- 9月号（2023年9月1日発行）
「地図・GIS 学習を一貫して実践するためにはどうすればいいのか？」（地図・GIS ユニット：國原幸一朗，伊藤智章）
- 10月号（2023年10月1日発行）
「SDGs を活用した地理教育におけるESD 授業 ー小・中・高一貫カリキュラムのアイデア」（ESD・SDGs ユニット：永田成文，阪上弘彬，今野良祐，齋藤亮次）
- 11月号（2023年11月1日発行）
「デジタル・テクノロジーの可能性と一貫地理教育」（テクノロジーユニット：岡本恭介，飯島典子，前田 諒）
- 12月号（2023年12月1日発行）
「地理学の体系と小中高一貫教育カリキュラムとの関係を探る試み」（地誌・系統・テーマユニット：河本大地，牛垣雄矢，金田啓珠）
- 1月号（2024年1月1日発行）
「フィールドワーク学習の小中高一貫地理教育を目指して」（フィールドワークユニット：中村洋介，大矢幸久，樺実土里，林 靖子，阪上弘彬）
- 2月号（2024年2月1日発行）
「立地概念を中核にした小中一貫授業プランの提案」（実践ユニットB：佐藤克士・大矢幸久）
- 3月号（2024年3月1日発行）
「一貫地理教育を意識した中学校の単元開発ー日本の諸地域「関東地方」ー」（実践ユニットA：鈴木達也・吉田剛）
- 4月号（2024年4月1日発行＜最終回＞）
「近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理教育の可能性」（実践ユニットA：吉田剛・高木優・牛込裕樹・木場篤）

1. カリキュラム理論

■学会発表

日本地理教育学会第73回大会シンポジウム 2023.8, 日本地理学会秋季大会 2023.9, 日本社会科教育学会 2023.10, 人文地理学会地理教育部会 2024.2, 日本地理学会春季大会 2024

■報告

○吉田剛・國原幸一朗(2023.12):シンポジウム 幼小中高を一貫する地理教育ナショナルスタンダードの可能性ー趣旨と総合討論. 新地理 71-3, pp.48-51.

■論文

○吉田剛(2023.3):近未来社会の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの創造. 月刊「地理」vol.68(4). pp.89-95.

○吉田剛(2023.6):近未来社会の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの理論.【前編】.月刊「地理」vol.68(7). pp.82-87.

○吉田剛(2023.7):近未来社会の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの理論.【後編】.月刊「地理」vol.68(8), pp.92-97.

○鈴木達也・吉田剛(2024.2):一貫地理教育を意識した中学校の単元開発ー日本の諸地域「関東地方」ー. 月刊「地理」vol.69(3), pp.90-95.

○吉田剛・高木優・牛込裕樹・木場篤(2024.3):近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理教育の可能性. 月刊「地理」vol.69(4), pp.112-117.

○永田成文(2023):持続可能性に基づいた小中高一貫地理教育カリキュラムの構想ーSDGs を活用した地理 ESD 授業ー. 新地理 71-3, pp.52-55.

○吉田剛・鹿内隆世・都築和希(2023.10):一貫地理教育カリキュラムにおける小学校社会科の単元開発. 日本社会科教育学会全国大会発表論文集 第19号 第73回全国研究大会, pp.41-42.

○吉田剛(2024.3):幼小中高一貫地理教育カリキュラムにおける持続可能性の概念とウェルビーイング. 宮城教育大学紀要, 第58巻, pp.141-157.

2. 国内カリキュラム

■学会発表

○守谷富士彦:歴史教育と地理教育の小中高一貫カリキュラム研究史の比較, 2024年3月20日, 日本地理学会春季学術大会(青山学院大学)

○近藤裕幸:公民教育と地理教育の小中高一貫カリキュラム研究史の比較, 2024年3月20日, 日本地理学会春季学術大会(青山学院大学)

■論文

○吉田剛(2023.3):近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワーク. 宮城教育大学紀要, 第57巻, pp.137-157.

○吉田剛・管野友佳(2023.3):オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州幼小中高一貫地理シラバス 2015年版の地理的探究スキルの分析ー我が国の「社会的事象等について調べるまとめる技能」の改善に向けてー. 宮城教育大学教職大学院紀要, 第4号, pp.51-63.

3. 諸外国カリキュラム

■学会発表

○阪上弘彬「一貫地理カリキュラムにおける地誌学習はいかにあるべきかードイツの地理教育の分析」日本地理学会春季学術大会公開シンポジウム「次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性」, 2024年3月19日

■論文

- 阪上弘彬, 永田成文, 菅野友佳 (2023) : 世界の地理教育の時勢 (幼小中高一貫, 市民性教育等) —オーストラリア連邦を事例に. 地理, 68 (5), 86-92

4. ESD・SDGs

■学会発表

- 永田成文 (2023) : 持続可能性に基づいた小中高一貫地理教育カリキュラムの構想—SDGs を活用した地理 ESD 授業—. 2023 年度日本地理教育学会第 73 回大会シンポジウム「幼小中高を一貫する地理教育ナショナルスタンダードの可能性」, 2023 年 8 月 19 日
- 永田成文 (2024) : 小中高一貫カリキュラムを見据えた ESD としての地誌学習の構想—現代世界の諸課題に着目して—. 日本地理学会春季学術大会公開シンポジウム「次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性」, 2024 年 3 月 19 日

■論文

- 永田成文・阪上弘彬・今野良祐・齋藤亮次 (2023) : SDGs を活用した地理教育における ESD 授業—小・中・高一貫カリキュラムのアイデア—. 地理, 68 (10), 90-95.
- 永田成文 (2023) : 持続可能性に基づいた小中高一貫地理教育カリキュラムの構想—SDGs を活用した地理 ESD 授業—. 新地理 71-3, pp.52-55.

5. 地理学体系

■学会発表

- 牛垣雄矢 (2023) 小学校社会科及び中学高等学校地理における人口の扱いに関する一考察. 2023 年度日本地理教育学会第 73 回大会シンポジウム.
- 金田啓珠 (2023) : 既習事項と地図を往復する地理総合の授業づくり—小中高一貫地理教育カリキュラムにもとづいて—. 2023 年度日本地理教育学会第 73 回大会シンポジウム
- 河本大地 (2023) : Z 世代の大学生にとっての WebGIS—地理院地図, 今昔マップ, RESAS, ハザードマップポータルサイトの何が使えて何が使えないのか?—. 2023 年度地理科学春季学術大会, 広島大学文学部 (東広島市) 2023 年 6 月 3 日
- 河本大地 (2023) : 地域学習や生涯学習としての地理学巡検の実際—人と地域を育む手法としての課題と可能性—. 地域地理科学会 2023 年大会シンポジウム「未来を拓く地理学巡検—人と地域を育む手法としての課題と可能性—」, 岡山大学津島キャンパス (岡山市北区) 2023 年 6 月 25 日
- 河本大地 (2023) : 高等学校「地理総合」で育成すべき Web GIS 活用力とは?—必履修化前段階の大学新生から学べること—. 日本地図学会 2023 年度定期大会, 岐阜県図書館 (岐阜市) 2023 年 8 月 26 日
- 河本大地 (2023) : 義務教育段階の学校におけるローカル地域学習の地域多様性整理—ここまでにできたことと今後の課題—. 2023 年人文地理学会大会, 法政大学市ヶ谷キャンパス (東京都千代田区) 2023 年 11 月 26 日
- 河本大地 (2024) : 「地誌」と「系統地理」の関係を小中高一貫で考える—小中高一貫地理教育カリキュラムを構築するために—. 日本地理学会 2024 年春季学術大会シンポジウム「次期改訂に向けての小中高地誌学習の新たな方向性」, 青山学院大学青山キャンパス (東京都渋谷区) 2024 年 3 月 19 日

■報告

- 河本大地 (2024) : 趣旨説明およびコーディネート. 人文地理学会第 57 回地理教育研究部会・地域地理科学会瀬戸内部会シンポジウム「小中高一貫地理教育カリキュラムを考える」, 玉野産業振興ビル (岡山県玉野市) 2024 年 2 月 3 日

■書籍

○河本大地（2024）：地域学習で社会を変えよう—地域づくりとESD（世直し教育）—。齊藤俊幸編『地域活性化未来戦略』ぎょうせい，pp.196-213

■論文

○牛垣雄矢（2023）：小学校社会科及び中学高等学校地理における人口の扱いに関する一考察。新地理 71（3），pp.57-61.

○金田啓珠（2023）：既習事項と地図を往復する地理総合の授業づくり—小中高一貫地理教育カリキュラムにもとづいて—。新地理 71（3），pp.62-67.

○金田啓珠（2024）：既習事項と地図を結び付ける授業づくり。社会科教育 1月号（明治図書），pp.78-81.

○河本大地・牛垣雄矢・金田啓珠（2023）：地理学の体系と小中高一貫教育カリキュラムとの関係を探る試み。地理 68（12），pp.86-93.

○真田 樹，河本大地（2024）：高校生が抱く地理学習への関心と期待—「地理総合」履修前の高校生を対象としたアンケート分析を通して—。奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究紀要 2，pp.27-35

6. フィールドワーク

■学会発表

○阪上弘彬・中村洋介・大矢幸久・椿実土里・林靖子「日本の小中高の地理教育ではフィールドワークはどのようなテーマで研究されてきたのか—システムティックレビューの中間報告—」日本地理教育学会第73回大会，2023年8月20日

○大矢幸久「小学校における地理フィールドワークの再構築に向けて」千葉地理学会研究大会シンポジウム「ポストコロナ時代の『地域調査』とは」，2024年1月20日【シンポジスト】

■論文

○中村洋介・大矢幸久・椿実土里・林靖子・阪上弘彬（2023）：フィールドワーク学習の小中高一貫地理教育を目指して。地理 69(1)，pp.110-115

○由井義通・阪上弘彬・横川知司・潘意涵・原田歩・劉曉一・沈或磬・王莹・木村海斗・首藤慧真・村上正龍・徐敏諾・田淵雄一朗・溝口雄介・森俊輔・高亦揚（2024）：イギリス地理教科書における地域調査・フィールドワーク単元の分析。学校教育実践学研究，30，（印刷中）

7. GIS・地図

■学会発表

○河本大地（2023a）：高等学校「地理総合」で育成すべきWebGIS活用力とは？—必履修化前段階の大学新生から学べること—。日本地図学会2023年度定期大会，岐阜県図書館（岐阜市）本発表スライドはResearchmapで公開 <https://researchmap.jp/daichi/presentations/43101537>

○河本大地（2023b）：Z世代の大学生にとってのWebGIS—地理院地図，今昔マップ，RESAS，ハザードマップポータルサイトの何が使えて何が使えないのか？—。地理科学春季学術大会，広島大学文学部（東広島市）

■論文

○國原幸一朗（2023）：小学校から高等学校までの地理的技能育成における一貫性—地図とGIS（地理情報システム）を中心に—。名古屋学院大学論集社会科学篇，第60巻第1・2号，pp.181-203.

■著書

○伊藤智章（2023）：『ランキングマップ世界地理』，ちくまプリマー新書

○伊藤智章（2024）：『いとちりの防災教育にGIS』，二宮書店

8. テクノロジー

■学会発表

- 飯島典子・岡本恭介・笹平剛(2023)：幼小接続期の発達と生活に応じた安全教育－360度バーチャル空間を活用した危険予測教材の開発－. 日本地理教育学会第73回大会. 宮城教育大学
- 飯島典子(2023)：幼児教育から考える小学校地理教育. 新地理, 71(2), pp.57-61.

9. 実践

■書籍

- 鈴木達也・吉田剛(2024.2)：一貫地理教育を意識した中学校の単元開発－日本の諸地域「関東地方」－. 月刊「地理」vol.69(3), pp.90-95.
- 吉田剛・高木優・牛込裕樹・木場篤(2024.3)：近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理教育の可能性. 月刊「地理」vol.69(4) (印刷中).
- 近藤裕幸・伊澤直人・栗本一輝・小澤裕行・児玉和優・鈴木瞭・八木龍一(2024)：「小中高校と大学教員の共同研究による小中高一貫の視点からみた単元『身近な地域調査』の課題と改善」愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第5集』（愛知教育大学出版会）pp.118-141.

■論文

- 金田啓珠(2023)：既習事項と地図を往復する地理総合の授業づくり－小中高一貫地理教育カリキュラムにもとづいて－. 新地理 71-3, pp.62-67.
- 牛込裕樹(2023)：地理総合における地球上の位置や時差の学習の実践と課題. 新地理 71-3, pp.68-71.
- 吉田剛・鹿内隆世・都築和希(2023.10)：一貫地理教育カリキュラムにおける小学校社会科の単元開発. 日本社会科教育学会全国大会発表論文集 第19号 第73回全国研究大会, pp.41-42.

■学会発表

- 内川健「変容する地域社会を持続可能性の観点から考察する小学校社会科の授業実践－地域の観光資源を生かした学習を事例として－」日本社会科教育学会第73回全国研究大会『課題研究Ⅲ「地域との連携・協働を通じた社会科授業の創造」, 2023年10月29日

研究グループ公式ウェブサイト

小中高一貫地理教育カリキュラム研究グループ

<https://sites.google.com/view/coherence-geography-education/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

日本地理教育学会・小中高一貫地理教育カリキュラム研究グループ 2023年度活動報告
編集事務局：飯島典子（宮城教育大学）
2024年4月10日発行